
クレスト！

越後ハレル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレスト！

【Nコード】

N2334L

【作者名】

越後ハレル

【あらすじ】

高校生の少年は、星と夜ソラを見るのが好きだった。「僕は、星とソラを見るのが好きだ。けど最初はくだらない理由でそれを始めたんだ」

そう言った後、少年は静かに語りだした。

ブローグ - 夜明け前(前書き)

以前は、別垢にて書いてましたが心機一転こちらで書きます。

プロローグ - 夜明け前

午後十時を回ったところだった。

高台にある丘から見えていたはずの陽は落ち、闇が生まれ、

そして頭上には星という宝石が散りばめられた。

体に突き刺さるような、夏の暑さも影を潜め、少し風も出て心地よい。

そんな闇と輝きにつつまれた丘に、二人の人影が寄り添って座っていた。

「僕は、星とソラを見るのが好きだ。けど最初はくだらない理由でそれを始めたんだ」

夜空を見ていた影の一人が、突然喋りだした。

少年のような、まだ幼さを残す、少し高い声だった。

「くだらない理由……?」

そしてもう一人の声が発言を促すかのように聞いた。

さっきの声よりもっと高い、女の子の声だった。

隣り合って丘から星を見ていた二人だが、

理由を問いかけられた少年は、女の子の方を見ることもせず

まるで自分に言い聞かせるかのように、ただソラに向かって語りだした。

「小学生の頃、近所に仲の良かったお姉さんがいた。

小さい頃から病気がちだった僕は、外で元気に走り回る子供達と仲良くできなかつた。

けど唯一、僕の友達と呼べる存在だったのがそのお姉さんだった。

引っ込み思案な当時の僕と違って、お姉さんは活発そのものって性格だったけど

不思議と気があつてよく遊んでた。

一緒に本を読んだりとか、キャッチボールやったりとか、海に行ったりとか……とにかくそんな感じ。

少し元気すぎた人だけど、いつも僕に見せる笑顔とショートヘアがすごく素敵な人、

そして僕が一番好きな人だった。

だから……ある日、僕はお姉さんに告白することを決心したんだ」

「へ〜！ 仁も、なかなかやるじゃない！」

「うっ……うっさいな。」

それに告白って言っても、付き合っただけじゃない。
い。

ただ単純に好きって伝えただけなんだ。

子供の告白だよ。今も子供だけだよ」

「うんうん。それで？」

「僕がお姉さんに告白の言葉を伝えようとしたら、

お姉さんは人差し指一本を立てて、その指を僕の唇に当てた。

まだその言葉は言わないで、って意味を込めてね。

その後、お姉さんは僕の手を引っ張って、この丘に連れてきてくれた。

今日と同じような輝くソラの中、僕は言いかけてた告白の言葉をもう一度口に出したんだ……

「けど……」

「……けど？」

「僕の告白を聞いた後、お姉さんはソラを指差した後に行ったんだ」

『この夜空に輝く星を見てみて。』

そしてあなたが見たこともないような、私が見たこともないような
一番きれいな星を見つけてちょうだい』

「……ってね。お姉さんは、それしか言ってくれなかった」

「へへ。なんか意味深だねえ。」

それで見つかったの？ 綺麗な星は」

「ううん、結局見つかってない。」

それから毎日この丘に来て、そして毎晩探し続けた。

でも最近になって少し分かったんだ」

「何を？」

「一番綺麗な星なんて最初から無かったんじゃないか……って」

「それは、お姉さんがあなたを子供扱いして、そういう言い回しをしたってこと？」

「多分、半分正解。……多分だけど。」

何度見ても結局分からなかった。

どの星も光輝いている。

でも一番きれいな星は？ 僕もお姉さんも見たこと無いような星は？

分からない。見つからない。

そして、それが分からないまま月日が経っていったんだ」

「さっき、半分正解って言ったけど残りは？」

「……本当の正解は今でも分からない。

僕が告白した一ヶ月後、お姉さんは交通事故で亡くなった。

お姉さんと、その知り合いが運転していた車が事故に遭って二人とも……ね。

犯人はおるか、未だ原因すらハッキリ分かってない。

現場にあったのは、ひねり曲がったガードレールと半壊していた車だけだった。

僕はショックだった。泣いた。

とにかく泣いた。

泣ってこんなに止まらないんだなってその時は思った。

けど僕の涙が止まったのは、事故からそう遠くない日だった」

一旦、間を取ってから少年はもう一度語りだした。

「お姉さんの葬式の日、

亡くなったことを悲しむ声が会場のいろんなところから聞こえてきた。

けどそれは僕の想像してた言葉とは違かった。

物静かな子、おしとやかだった子、おとなしかった子

あまり家から出なかつた子、読書がすきだった子……って。

それは、僕が見ていたお姉さんとはまるで違う印象を持つ言葉だった。

僕は、本当に疑った。もしかして違う人の葬式に来たんじゃないかって。

でも、紛れも無くその場所は、お姉さんの葬式会場だった。

じゃあいつも笑顔で僕に接してくれたお姉さんは誰だったんだろう。

僕と遊んでくれたお姉さんは誰だったんだろう。

あの夜、僕をこの丘に連れてきてくれたあの人は誰だったんだろう。

また一つ分からなくなつた。けど一つだけ分かつた。

好きだ、なんて言ったけど結局僕はお姉さんのことを全然知らなかったんだって。

お姉さんがいなくなっただってという事実以外、あまりに分からなくて、そして知らなかった。

だから、それから僕は、毎日星を見続けた。

この夜空に輝く星を毎日見て。

そして僕もお姉さんも見たことないような一番綺麗な星を探して。

当時、お姉さんが残した言葉だけを頼りに。

そして、今でもお姉さんが何を言いたかったのかを知りたくて。

……それが僕が星を見る理由さ。

納得してくれた？」

少年がそう語りを終えると、

話を聞いていた少女は、少年に飛びつくように抱きつき

「仁えらい！ 私、ちょっと感動したよ！」

と、興奮気味に先ほどの感想を少年に喋り始めた。

仁と呼ばれた少年は、少し照れながらも冷静に少女に語りだした。

「いやいや、そこまで立派な話じゃないよ。」

あれから何年も経っちゃったしさ。

今更、笑い話にもならないのかもしれない」

「全然！ そんなことないよ！

思い切って星を見る理由を聞いて良かった」

「と、ともかく話はこれでおしまい。」

僕は、家に帰って寝るよ」

「え〜。つまんないの。」

夜は、これからだよ？」

「明日も学校なんだよ。そろそろ寝なきゃ。」

それより……一人でも大丈夫そう？」

「うん、今日は星も空も綺麗だし、闇もいつも通り元気だから

私一人でも大丈夫だと思う」

「それを聞いて安心したよ。それじゃ、おやすみ。クレス」

「うん、おやすみ。仁」

そう言って仁と呼ばれた少年は丘を降りた。

Part 1 - 星間の女の子 -

闇が喰われつつあった。

闇にはない　闇が喰われつつあった。

まるでパンをちぎって食べていくように、少しづつ闇は欠けていった。

午後十時を回ったところだった。

夜の街というものは大きく分けて二つある。

街が闇を利用し、人々にネオンの光と楽しみを与えるものと

闇が街を包み、人々に静けさと眠りを与えるものの二種類だ。

人間にとってどちらが住みやすく、

そして、より安全な夜なのかは定かではないが

どちらかといえば後者の夜に当てはまる田んぼ道を一台の自転車が走っていた。

道はかなり狭く、人間が二人並べないぐらいの細道であり

その左右には、田んぼという泥沼がすぐそこに待ち構えている。

自転車のスピードはそれなりに出ているが、

タイヤが回転する度にガタガタという振動が自転車全体に伝わり、

カゴに入った茶色の学生カバンは、そのせいで常時浮き上がっている。

その手前にあるサドルの上では、小柄な少年がハンドルを強く握りしめ振動に耐えていた。

白い学校指定の薄いYシャツを纏っているのを差し引いても、

少年の体は線が細く、背丈もあまり無かった。

その小柄な体で上手くバランスをとりながら、跳ねて走る自転車を制御していた。

少年が自転車で走っているその道は、

農作業する人が徒歩で田んぼを行き来するために作られた細道であり

そもそもバイクおよび自転車など、走行に不安定な二輪車向けの設計になっていない。

アスファルトなどで舗装されていない代わりに

砂利、それも大小不揃いな石が道に敷き詰められており

普通のママチャリで走行するには、いささか不安定だ。

しかも昼間に農作業をするという前提のせいか、夜間用の街灯などの類は一切無い。

道を照らすのは、弱々しく光を出す自転車のライト、

少し霞みつつある月の光、

そして小さな水晶球のような光を出し舞うホタルのみ。

そんな状態で事故が起こらないわけが最初から無かったのかもしれない。

運が悪いというか、案の定というか

ママチャリは不揃いな砂利にまじっていた大きい石につまづき

「うああっ!」

という少年の声が辺りに響いた後、田んぼから派手な水しぶきが舞った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2334/>

クレスト！

2011年1月25日22時45分発行